

# 景 / 観 / 文 / 化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2023-05-01

## 目次

- P1  
■巻頭  
個性ある都市活動を支える景観づくりと行政 / 国吉 直行
- P2～5  
■ TDA NEWS 1  
David Sim とのダイアログ  
/ 鈴木 俊治・中野 竜 他
- P5  
■ TDA NEWS 2  
アーバンフォレスト政策 メルボルン市の取り組み 01 / 並河 みき
- P6  
■「生物多様性」を通して都市と生活が見えてくる その6 / 並河 みき
- P7  
■景観故記  
No.5 まちなみを形成する持続的なヨーロッパの集合住宅団地 / 江川 直樹
- P8  
■身近な景観を作る  
第7回 勝山町の暖簾：住民と共に  
つくるデザイン / 武山 良三
- ホワイトボード



新しい景観—富山市まちなかマーケットとLRT

## 個性ある都市活動を支える景観づくりと行政

私は、現在、横浜市、富山市、横須賀市、鎌倉市において、都市デザインや景観整備のアドバイザー、政策参与、委員会委員などの役割を担っています。2015～2018年には韓国光州広域市でも活動。それ以前の1971～2011年には横浜市役所都市デザイン室の現場で活動しました。

それぞれの都市は、市民生活の豊かさや企業活動の活発化など、都市の事情を踏まえた独自の長期目標を掲げ、まちづくりに挑んでいます。都市デザインや景観づくりは、こういった各都市、各地区の理念や目標を達成するための都市空間形成の活動であり、地域市民などとの議論などにより、地区の都市活動（土地利用）や、空間形成の理念をつくる活動から、都市空間として構築するための（建築物群など）町並み景観の工夫、道路や広場、公園などの公共空間の工夫といった取り組みがあります。地域の歴史や文化、自然的資産の継承、創造という視点もあるかもしれません。そして、実現するために景観や公共施設のガイドライン、地区計画などを用いる場合もあります。地区のかじ取りとして、これらを総合的に進めるのが行政です。必要に応じて外部の景観デザイナーなど多様な分野の専門家の協力を求めますが、その際、地区での長期的な展開戦略を持って全体を適切にコーディネートする行政側の活動が重要です。各地区の取り組みにおいては、景観デザインの全てのメニューを採り入れる必要はなく、歩行者空間、建物の形状、色彩、光、緑、歴史文化などから、地区に応じたメニューを選択し複合することが都市や地区の個性を育てます。近年は、市民交流の場としての公共空間の活用や改良に力を入れる都市が増えつつあり、時代のニーズを受けて都市空間を成長変化させる対応力も各都市行政に求められています。

都市デザイナー・都市プランナー／横浜市立大学客員教授／TDA代表理事 国吉 直行

## David Sim とのダイアローグ

新型コロナウイルス感染症が落ち着きを見せ、まちには人出が戻ってきた。3年にもおよぶウイルスとの闘いの末、共存の道を歩み始めたまちは活気を取り戻しつつあるように見える。人が戻ってきたこれからの街に必要なことは何か？

TDA会員で芝浦工業大学・鈴木俊治教授とスウェーデンのアーバンデザイナーで建築家、Softer代表のデイビッド・シム氏 (David Sim 以下、デイビッド) とのダイアローグ (対話) を通して、日本のまちの景観や賑わいについて考えてみた。

本企画は、パブリックスペース特化型メディアプラットフォーム「ソトノバ」と共同で実施した。

## デイビッド・シム氏と近著について

ランディクト/TDA正会員 中野 竜

デイビッドはヤン・ゲール氏の都市設計・デザインコンサルティングファームである「ゲール・アーキテクト」の元クリエイティブディレクターで、現在はスウェーデンに自身の事務所「ソフター」を構える建築家・アーバンデザイナーです。

デイビッドはゲール・アーキテクトにおいて、世界の各都市でマスタープラン、都市戦略、都市デザインを手がけ、特にクライストチャーチ (ニュージーランド) の震災復興計画で高い評価を得ました。彼の都市デザインの特徴は、歩行や自転車によるアクセスを重視したスローでローカルな暮らしを目指している点にあります。これは単に街路を歩くことだけでなく、建物1階のファサードや階段でのコミュニケーション、道路横断の困難さ解消にまで細かな配慮をしています。また、2021年に発行された「ソフトシティ 人間の街をつくる」では、都市部の生活における「隣人 (neighborhood)」との関係性にまで言及し、より「ソフト」なまちづくりを志向

しています。

§ § §

今回の来日は、デイビッドと小泉隆教授 (九州産業大学) との共著である「北欧のパブリックスペース 街のアクティビティを豊かにするデザイン」のプロモーションと日本の景観やまちづくりのリサーチなどを兼ねて計画されました。

この近著では、「北欧のまちづくり」について、豊富な写真と解説できめ細かく紹介されています。冒頭にデイビッドによる4つのエッセイがあり、それに続く本編として55の北欧の事例を見ることが出来ます。それぞれの事例にはその場所の構造的な解説や、北欧の人たちのまちづくりに対する意識なども紹介されており、北欧におけるまちづくりの理念と実際のデザインの両方が鮮やかに浮かび上がってきます。

特にEssay 1「気候・天候とともに暮らす」では、日本よりも高緯度にあり、夏が短く冬場の気候がさらに厳しい北欧にあって、人々がどのように屋外での活動を楽しんでいるのか、なぜそのような気候の下で楽しめるのかが考察されています。

これは北欧の文化に基づくものであり、この著書の事例が日本の気候風土や文化になじむのかといえば、そのようなケースは非常に少なく、単なる「移植」ではうまくいかないと感じます。しかし、文化とまちづくりがどのような関係性を持っているかは理解することができるでしょう。日本は、北欧のまちづくりの真似ではなく、日本の文化に基づくまちづくりを行ってほしい、と背中を押してくれる一冊になっています。

§ § §

彼自身、スウェーデンの大学で教鞭をとった経験があるそうです。今回のような学生を交えたダイアローグは彼の得意とするところであり、まちづくりを目指す若い世代にとって大変な刺激になったようです。

**活力はあるが美観には課題がある日本の都市景観についてどう考えたらよいか？**

芝浦工業大学教授/TDA理事 鈴木 俊治

日本には活力ある市街地、商店街は多数あるが、それらの景観、美観については残念ながらほとんどの地区においては優れているとは言えないだろう。ヨーロッパの旧市街を訪れ歴史に根差した風格と趣のある街路景観を見て、日本との違いを実感し愕

然とした経験した人は少なくないはずだ。

日本と西欧では気候風土、歴史文化、地震の有無、建築材料と工法など様々な違いがある。西欧諸都市の建築群はそのような事項を背景として、長年にわたり都市の基盤であり象徴として発展的に継承されているが、日本では建築群に対してそのような概念があるのは伝建地区など一部に限られよう。特に第二次大戦後は資本主義と経済のグローバル化、建設技術の発展によって、建築のかたちや表情は非常に短期間に大きく変わり、法令さえ守っていれば意匠としてはなんでもできる (その何が悪い!?) という状況にある。すなわち建築特にそのファサード表現に関しては、拠りどころとなる規範がないまま経済原理によって推移している街が多い。

一方、住民や商業者、来訪者によってその街並みファサードの拠りどころが共有されていない状況において、表層を揃えることはほとんど意味がない。景観とは世代間にわたる人々長年の営みが蓄積され現出したものであり、表層のお化粧では決してない。また同じ街路でも多くの人々が行き交っている景観と、店が閉じて人が全くない景観とは全く異なったものとなる。歩行者や滞留者の存在や振る舞いは景観の重要な要素である。

例えば筆者が長年まちづくり活動に関わっている東京・神楽坂地区のメインストリートである神楽坂通りは、多くの人々が行き交う。交通や犯罪の危険はほとんどなく安心して安全に歩ける。沿道には様々な店舗が開き、快適でにぎやかなみちである。沿道の物的状況としては、狭い間口と深い奥行きという伝統的な地割が守られ、その敷地いっぱい、セットバックなしで隣棟との狭い隙間を挟んで、中層ビルが立ち並ぶ。1階部分は原則店舗とされ、大きな開口部をもってみちに正対して開く。6階まではセットバックなしだがそれ以上に建てる場合は道路斜線に沿って壁面後退する。そのような事項がまちづくり協定に記されていることもあり、建築群としての形態特に地割と1階部分の形態と用途はほぼ守られている。一方、ファサードデザインは多種多様であり、そこに多種多様な屋外広告物が掲出されている。注1)

神楽坂通りに限らず、賑わいのある快適な商業地区は各地にあるが、そのファサード景観はこのままでよいのだろうか？ しかし拠るべき規範が共有されていないなか、



何を基準として街並み景観を考えればよいのか？表層のお化粧をしても意味がない。このことは筆者が長年考え続けていることで、この質問をデイビッドにストレートに投げかけた。それに対するデイビッドの見解は次のようであった。



公園で筆者や学生たちと対話するデイビッド。対話は2023年3月20日、午前10時から2時間ほど、春爛漫の神楽坂・白銀公園で行った。

外観が美しい、美的な (aesthetic) 街並みの意味とは、氷山の頂部の一角 (図1) のようなものだ。街にとってはそれよりも大切な、それ以前に解決すべき問題が多数あり、それらが解決されているのであれば美観改善に取り組むのもよいだろう。



図1 街路環境の構成要素とヒエラルキー (デイビッドの話とスケッチをもとに筆者作成)

街路景観は建築ファサードのみによってつくられるものではない。まずは街が安心・安全であることが必要条件であり、それを前提として「歩くことの快適さ・楽しさ」が備わっていることが重要である。街の魅

力はアイレベルすなわち1階を中心とする低層部に集約される。そのレベルで人々は五感すべて使ってまちを体験する。アイレベルに多様なアクティビティがあり (商業地では、特に店舗が開いていることが重要)、人の手が入っており、常に変化していることが街に魅力を与え、人々が集まる。

標準的な街路の断面 (図2) において、歩行者に見えるものとして建築ファサードは一部であって、他にも車、街路樹や植栽、電線電柱、交通信号や規制表示、屋外広告物、商品、商店の内部、そして路面などさまざまある。街路の見かけの景観を改善するにはそれらのすべてを扱う必要がある。それらはそれぞれ管理者や関係法令が異なり、別々の目的や論理で行動するため、美観向上を目的とした全体調整は非常に困難である。

開発、再開発に際しては小さなスケール感の保持が重要だ。大資本の開発には customer はあっても neighborhood という概念はない。徒歩圏にどれだけ多様な小さな変化があるかが、Life を豊かにする。小さな公園、小さな店、知り合いに出会う・知り合いになれるチャンス、ちょっと快適に座れる場所などである。Neighborhood とは物理的だけでなく心理的にも近く、親近感を持てる範囲である。

交通エンジニアなどは常にデータを用いて議論するが、都市デザイナーもイメージだけではなくデータを用いてデザインし、人々を説得する必要がある。自動車通行量よりも歩行者通行量の方が10倍多い街路では、歩行者中心に考えて街路や建築をデザインするのが当然と考えられるであろう。そのことを関係者に示し、説得するこ

ともデザインのうちである。私の仕事の多くは人々の説得である。

改めて、美しい、美観の整った街とは何を指すのか？その定義を明らかにする必要がある。例えば、近年では中高層建築の一部に木材が使われるようになってきたが、大多数の建築はコンクリート構造である。コンクリートは製造や施工、解体に多大なエネルギーを要し、サステナブルとは言えない。そのことを知れば、コンクリートを用いた建築は美しいとは見えないであろう。一方木材は環境に優しく肌触りも暖かい素材であり、美しいと言える。

デイビッドの話は非常に魅力的で納得できるものであった。一方、安全安心で魅力・快適という条件が整っているのであれば、「かたち」としての景観はどうでも良いのかといえば、おそらくそうではないだろう。地域の自然環境、歴史文化、商人気質などに根差した何らかの緩やかな規範が、地域の人々による協議の中で育まれ継承されていることが、大切ではないだろうか。それが何か、形としてどのように表現されるべきか？筆者がひきつづき地域の人たちと考えていきたいテーマである。

注1：神楽坂の屋外広告物については、2019年4月からは屋外広告物ガイドラインが施行されて過大・高彩度色のものなどは新設は原則として認められないが、遡及はされないため現状では多種多様なものがみられる。

### デイビッドとの対話を通して

今回の企画には芝浦工業大学の学生も参加し、デイビッドと対話した。参加した学生のみずみずしい捉え方を紹介する。

阿部 楓矢<sup>※1</sup>

デイビッドのお話は都市についての考え方をより深くしてもらえたものだった。特に街並みについてはとても興味を持つお話だった。デイビッドは木材や手で塗られた外壁などには温かみを感じられ、工場で作られた外壁やコンクリート造の建物はまた違った雰囲気が出ると言っていた。これらの違いについて読み取り、どう組み合わせていくのかが都市の風景を形成するうえで

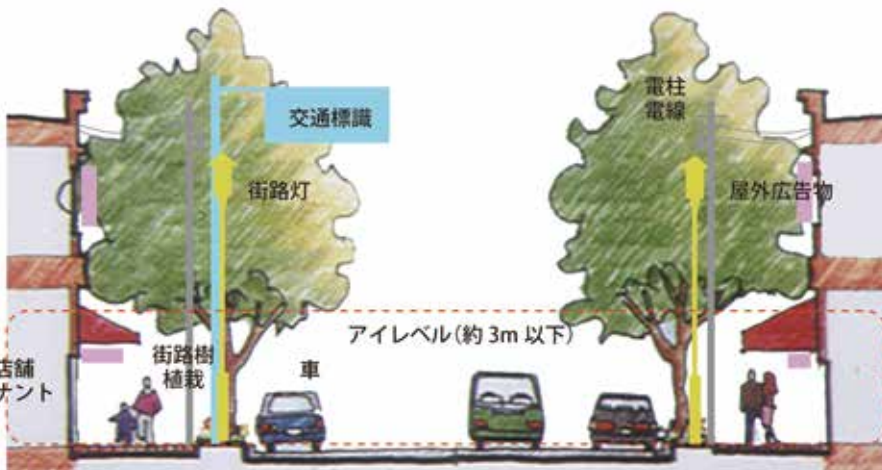


図2 標準的な街路断面の構成要素 (デイビッドの話をもとに筆者作成)

大切だと思った。また、路面に面している部分が街並みをつくるために重要な部分になることも分かった。野菜を置いているお好み焼き屋さんのお話があった。8割から9割の歩行者はお店の周辺に視線がいき、歩くスピードが遅くなる。つまり、歩行者にとって建物の入り口付近やそのエッジの部分は心地よい景観を生み出すための重要な要素の一つだとわかった。

最後にデイビッドは都市を俯瞰的にかつ細かいところまで本当に見ている。歩行者の行動やその場所の街並みや建物の外壁の素材、公園の木やベンチなどの素材、それらによってどのような風景が生まれるのかなど様々に見て、全体としてどのようなになっているのも考えられていた。すぐに見て分かるものではなく、隠されている部分を探し見つけていくことがさらに一つ上のステップに行くために必要なことだと思った。



#### 奥村 奏<sup>※1</sup>

今回、世界中でパブリックスペースの活性化やデザインを行っているデイビッドのインタビューを聴講することができた。英語によるインタビューだったので完全に全てを聞き取ることは難しかったが「良い景観」というものの考え方を基礎的な部分から実際のまちを例に挙げてまで教えてくださったので大変貴重な機会だった。

デイビッドは、都市やまちづくりに関する従来のアプローチに疑問を投げかけ、もっと柔軟性のある提案をすることが重要であり、特に公共空間の有効的な使い方やコミュニティの重要性を強調していた。この考えこそが、現代のまちづくりに非常に参考になるものであると思った。特に、ヒトの五感に重きを置いたまちづくりをすべきだという点がとても印象的だった。単に良さそうな景観を機械的に作り出すわけではなく、そこを利用する人たちの気持ちになって、その場所に合ったものを五感を通じてデザインする。これによって、柔軟性のある提案をすることができるということが理解できた。

また、彼が提唱する「ソフトシティ」の概念は、人々が自分たちのまちを所有し、自らの手で改善していくことが重要であるというものであり、そこで彼は市民参加や地域の特性に合わせた柔軟なまちづくりを進めることが重要であると主張していた。これはまさに現代のまちをより持続可能で

魅力的な場所にするために必要なことだと思った。

このようにデイビッドの考え方は、持続可能で柔軟なまちづくりに向けた方向性を示していると感じた。今後も彼のアイデアや考え方を参考にしながら、より良い研究に取り組んでいきたいと思った。



#### 三橋 晃大<sup>※1</sup>

今回デイビッドの話聞いて彼は「Life」に重点を置いた考えを持っていると感じました。特に人間の進化の過程から私たちが歩く際の目線の配り方といった細かい部分まで研究して、日本の問題点として目線レベルのファサードデザインはしっかりとしているが、それより上の階のデザインは良いと言えないという指摘にハッとさせられ、まちや建築の捉え方の引き出しが増えたように思います。また、看板広告による景観の悪化だけでなく、建物のスタイルに統一性がないと景観が良くならないという点も今後意識して研究に取り組んでいこうと思いました。デイビッドが日本の問題点として「自転車交通によって歩行者空間が限られている」ことを挙げていました。普段自転車に乗る自分としては、自転車通行帯がない場合歩道を走らざるを得ないことやそもそも車道と歩道の境界が分かりにくいといったことから仕方ない部分もあるのではないかと思います。海外の人から見て日本はその問題をどう解決していけばいいのか、デイビッドの具体的な考えを知りたかったです。また、空間に役割を与え、その役割が分かるようにしないといけないという指摘に関して、日本のパブリックスペースでこれを達成出来ている所はまだまだ少ないのではないかと私も思っていたところであり、この点を解決することができるといいなと思いました。



#### 中澤 駿<sup>※1</sup>

デイビッドのインタビューから、街をつくる建築の在り方は様々な条件の上に成り立つものであり、建築ありきではなく街を形作る人の営みや気候、風土、伝統、防災等があったのものであると感じた。

まず考えるべきは人々の人生「life」であるということに感銘を受けた。実際に年配の方を迎え入れるような作りをした巢鴨や来訪者の好みや提灯などに表れている横浜中華街などで見ることができるとおっしゃられていたことから、人々の life に

よって街は大きく影響を受けているということを感じ、そのことから街は建築のみで構成されているのではないということを感じて改めさせられた。

また、人々の目線に入る景観が街路の印象には大きな影響を与えておりいる。広告や道、樹木といった要素はもちろんのこと普段何気なく視野にとらえていた建物の外壁の仕上げまで、人工的なものからそうでないものまで、建物の利用方法やテナントなど全てが情報となっていると感じた。そのディテールを間違わずに利用、表現することが必要である。そのようなものを全て含めた全体が街路であり、景観とは奥が深いと感じた。

自分はこれまでも都市を人間の生活を重視してとらえることはあっても、life ととらえることはなかったので、直接目に見えない状況も考慮することが必要であると思った。



#### 畠 菜央<sup>※1</sup>

印象的であったのは私たちに向けて講演をしてくださっている際に、実際に物に触ってみるなどの様々なアクションを交えていたことです。最初は私たちに伝わりやすいように大袈裟に振る舞っているのかなと考えていたのですが、「デイビッドはいつもそうだよ」と教えていただいた時は驚愕しました。普段からデイビッドがどのような視点でまちを観察しているか、どのようにまちと関わっているのかが少しわかることができたような気がしました。講演内容もとても勉強になるものでしたが、デイビッドのまちとの向き合い方を知ることができたことが、自分自身が今後どのように向き合っていくべきか考える良いきっかけになりました。

また「高齢化や過疎化が進む中で、高齢者に向けたコミュニティスペースはどうあるべきか」と質問したところ、「椅子も机もそんなに高い物ではない。だからやってみることが大切である」という回答をいただきました。確かにただ椅子と机を置くだけでも立派なコミュニティスペースになる、それくらいなら私もすぐに取り組むことができると感じました。大きな変化こそないかもしれませんが、小さな取り組みからでも、まずはやってみないと何も得ることができない、そんなメッセージを感じました。



## 鈴木 絢音<sup>※1</sup>

伺った話の中で以下の2点が特に印象に残りました。

1点目は、公共空間が活性化するとどんな利点があるかという点についてです。私は、まちが元気になれば人々の生活が豊かになると抽象的にしか考えられていませんでした。しかし、デイビッドからまちが人の心の拠り所になるという具体的なキーワードをもらい、私自身がどんな想いを持って研究や就職活動をすればいいのか明確になりました。公共空間においてなにかモノを作るのは、ハード面しか見ることができなかったのですが、見方を変えてこのようにソフト面についても言及ができるようになりたいと思います。

2つ目は、デイビッドの朗らかでユニークな性格です。少し堅い雰囲気のある方だと思っていたのですが、話し方や仕草からとても優しくて大らかな方だと感じました。公共空間という人と生き物を中心として環境配慮した提案をするには、何事にも優しく思いやりを持って過ごすことが重要

ではないかと思います。それにより、考え方や思いつくアイデアも変わってくるのではないかと思います。公共空間において、細かい隙間を活用して小さな幸せや関わりを少しずつ増やすことで、全体としてまちの活性化につながるのだと改めて感じました。



## 東 航平<sup>※2</sup>

都市景観を氷山の一角に見立て、この景観が「安全」や「悪臭騒音のない環境」「交通利便性」など見えざる／当たり前として認識されている諸要因の上に成り立っているという説明はわかりやすく、身近な街並みを振り返る良い機会となりました。また「背後に壁があると不安要素が減り安心に繋がる」など人間の行動特性に基づく快適な空間への考察や、「顔見知りのバス運転手が高齢者のために少し待つ関係」を例とした顔見知りの隣人との関係の重要性についての考察を、とても興味深く拝聴しました。

中でも「小さな生活に着目する視点」が

特に印象的でした。神楽坂をはじめデイビッドさんは店先などで行われる人々の細やかな生活を愛していることが伝わってきました。複雑な要素の絡み合う都市空間において、人間の行動本位のスケールで計画されることの重要性を改めて実感し、将来私が建築家になった際も都市との境界に細やかな生活が生まれる建築を設計していきたいとも思えました。

※1：芝浦工業大学環境システム学科4年  
環境設計研究室所属

※2：芝浦工業大学大学院修士2年  
建築空間デザイン研究室所属



## TDA NEWS 2

### アーバンフォレスト政策 メルボルン市の取り組み 01

登録ランドスケープアーキテクト  
(JLAU,AILA) / TDA正会員 並河 みき

自治体における様々な取り組みを紹介する企画の第一弾として、今回はオーストラリアのメルボルン市によるアーバンフォレスト政策への取り組みを紹介する。

#### 13年にわたる干ばつによる危機感

メルボルンはオーストラリアの南東にある都市で、世界で最も住みやすい街ランキング (Economist Intelligence Unitによる) 一位に過去10回選ばれた都市である。現メルボルン市長のサリー・キャップによると、市内には8万本の市有樹木があり、その資産価値はおよそ800億円と見積もられる。こうしたみどりはメルボルン市の貴重な財産であり、市民と観光客を常に魅了してきた。

ところが2000年代前後から、メルボルンは13年間にわたる干ばつに見舞われ、市内樹木の健康状態が大幅に悪化した。実際に、樹木の予想寿命を市有の7万本について調査したところ、23%の樹木が次の10年で枯れ、さらに39%は次の20年で枯れるという衝撃的な結果が出た。その場合、通りの様子などがどのように変化するかを示したのが下記の添付写真だ。この調査結果がきっかけとなり、メルボルン市は樹木の未来について市民と議論を始めた。またその頃には気候変動に関する議論も盛んとなり、都市部の気温上昇が大きな課題としてとりあげられるようになる。そして、健康な樹木が都市部の体感気温を快適値に下げたことを認識していたメルボルン市は、現存する樹木の喪失を防ぐのみでなく、かつ植樹により樹木を増やすことで都市を冷や



す計画を策定した。これが現在のアーバンフォレスト政策だ。

#### 2040年までに樹冠による緑被率を40%に

アーバンフォレスト政策の数値目標は、2040年までに40%の樹冠による緑被率を目指すこと。この目標達成のために、継続して毎年3000本の樹木を植え続け、さらには屋上緑化と壁面緑化を進め、私有地の緑化をも支援していく予定だ。現在までの成果は、樹冠による緑被率が2012年の22%から25%に上昇したこと。この数字は少なく見えるが、今まで植えてきた樹木がこれから次々に成熟し、計画通り40%の緑被目標に到達する予測だ。また、樹木のみでなく2017年以降は、新たに低木や下草類を12.1万㎡にわたり植えたことで、生物多様性が保全・促進された。



メルボルン市ロイヤル・パレード通りの現在 (左) と将来、ニレの木が枯死した場合 (右) の景観



# 「生物多様性」を通して都市と生活が見えてくる その6

旧タイトル:「生物多様性」を通してヨーロッパの都市と生活が見えてくる

登録ランドスケープアーキテクト(JLAU,AILA)/TDA正会員 並河 みき

54号から58号まで5回の連載を終え、残すところあと2回。ここまで、EUによる生物多様性ブックレットの翻訳作業のなかで出会ったトピックをもとに、都市における生活者として、またランドスケープアーキテクトとしての視点で、話題を膨らませ提供してきた。生物多様性は非常に広範な学術領域でありその詳細や対策が見えにくいなか、私たち一人ひとりが都市の中でどのようにそれを理解し、関わっていくべきかを考えてきた。

ざっと振り返れば、55号で「散歩」を通して見る街並みと生物多様性のつながり、56号では、都市での生活が、地理的に離れた場所の生態系に及ぼす影響と、それを日常会話のなかで話題にする重要性、57号では、実際の都市における取組みとして、私に関わっているインフラプロジェクトの事例紹介、そして58号では、都市における住民の取組みについて取り上げた。今回は視点を少し変えて、自治体や企業による取組みについて、下記掲載パネルの内容に沿って考える。

## 生物多様性は企業や自治体にとってのビジネスリスク

今や、気候変動が財務リスクとして認識される時代に、もし企業が慈善事業に関わる感覚で生物多様性に貢献しようと考えたら、それは時代遅れと感ずる。そこには、ある種の「おまけ」感があり、必然性

の認識に欠けている。

実際、世界4大会計事務所のアーンスト・アンド・ヤング社のウェブサイトには、同社フランスにおける気候変動とサステナビリティ部門長による執筆で、生物多様性と事業リスクに関して次の記載がある。「世界経済フォーラム(WEF)によると、世界の国内総生産の半分以上が、自然に依存しています。(中略)これは、生態系の崩壊の結果、5社に1社が重大な事業運営リスクに直面する可能性があることを意味しています。(中略)生物多様性は農村部を超えて街や都市部にも影響をおよぼします。地方自治体、都市計画事業者、開発事業者は自然に関連する機会を戦略計画やリスク管理、資産配分の決定に組み込む重要な役割を担っています。」

Week43のパネル(下記の添付イメージ参照)では「会社に生物多様性のための行動をとるよう働きかけましょう」と促しているが、その事前ステップとして、もしもあなたの勤めている企業や自治体の取り組みを疑問に思うなら、そのことを周囲の人たちと話してみることをおすすめする。なぜなら56号で紹介した通り、そうした日常レベルの会話が、人々の共通認識を変えていくから。

## 日々の食生活を通して貢献

こうしてEUの生物多様性ブックレット(景観文化のホームページNote版で公開

中)に取り上げられている52のパネルを読み進むと、季節の食べ物や、地元産の食材、そして忘れられた伝統野菜などを食べることで、生物多様性に貢献できることがわかる。Week36では、社員食堂でこうした食エコの知識を利用し、さらには自分で積極的に調べて、社員食堂の運営に取り入れてもらうよう働きかけることが提案されている。例えば、東京における伝統野菜を、JA東京中央会が平成23年に定めた「江戸東京野菜」という呼称をキーワードに調べてみよう。そうすると、練馬ダイコン、亀戸ダイコン、内藤トウガラシ、雑司ヶ谷ナス、谷中ショウガなどいろいろな食材の名称が出てくる。こうした食材が、それぞれどんな味なのか興味をそそられたら、実際に食べてみたり、社員食堂の食材として提案してみよう。

以上のように、企業や自治体における取組みは、事業の中でどう生物多様性に対応するかという事業レベルと、毎日の勤務生活の中にどう取り入れるかという日常レベルの取組みがある。そして、どちらのレベルでも、疑問や意見を個人一人ひとりが声に出していくことがいま求められている。



※TDAホームページで当ブックレット翻訳パネルを公開中ですので、合わせてご覧ください。  
[https://note.com/tda\\_spinoff](https://note.com/tda_spinoff)  
QRコードからアクセスできます。

食エコを社員食堂に採用しよう

Week 36

社員食堂や学生食堂、デイケアセンターや病院、ケアハウスなどのキッチンには、多くの人々に食を提供しています。

あなたの食堂の責任者を説得して、食材を地元のエコファーマーから調達し、季節の果物や野菜を提供し、肉や魚の量を減らし、穀類や豆類、卵やチーズなどを材料とした料理に置き換え、忘れられた食材(キウイモ、スウェーデンかぶなど)を再発見するきっかけをつくり、未調理食材(果物や野菜の皮や卵の殻など)のゴミを減らし、コンポストにしましょう。

シェフは彼らの技術を少し調整するだけで、結果として生物多様性とあなた自身の健康に大きなプラスの効果があるでしょう。

© 2011 European Union  
Japanese translation © 2021 Miki Mizuta

会社に生物多様性のための行動をとるよう働きかけましょう

Week 43

あなたの勤めている会社が与える環境負荷(二酸化炭素排出や、河川沿い立地などにより)を相殺するために、生物多様性への取り組みを深めるように会社を説得しましょう。

どうやって? 自然保護団体(希少なエコシステムを復元したり、絶滅の危機に瀕している生物を救う活動をしている)を支援したり、生物の目録作成や保護活動への金銭的支援をしたり、会社の利益を原料や遺伝資源を提供している第三国と分け合ったり、生物多様性を保全する活動のための基金を設立したり、社員をこうした分野へ派遣したりすることによってです。

© 2011 European Union  
Japanese translation © 2021 Miki Mizuta

街区を構成する公共集合住宅

市民の9割が集合住宅に暮らしているというウィーン。中でも特徴的なのは、赤いウィーン（第一次世界大戦後、ハプスブルク家に代わり社会民主党が市政を掌握し、ウィーン市議会で初めて与党となり民主的に統治を行ったが、その1918年から1934年までの同市のニックネーム）と言われた時代に建設された多くの公共住宅（市営住宅）団地である。

これらの集合住宅団地は、街の街区、ブロックを構成する形で作られており、その多くは、上部に住宅のある街区沿いの住棟壁が穿たれて門となり、街区の内部は緑地化された中庭で、その多くが幼稚園や共同の洗濯場などを備えている。1920年代のウィーンにとって、かつての王朝内諸国からウィーンに移住した労働者層に低家賃の公共住宅を提供することが急務で、1923年から34年の間に、6万5千戸の市営住宅が建設された。400を超える建築事務所がその任を担ったとされている。住戸内部やエレベーターの設置等、内部的リニューアルは行われているのだが、その形態は、建設後100年近くが経った現在でも、堂々と街の歴史や景観を担っており、わが国の団地の状況とは相当に異なっている。ファサードの構成も、街とのスケールの連続性や人間スケールの表現など、スケールに対しての配慮が出来ていると感ぜられるものも多く、よく1920年代にこれだけのものがつくられたものだと、感心する。

筆者は文部科学省の研究補助（2011-15）を受け、多くの海外住宅団地再編、再生事例における空間的特徴を調べ、かつ体感してきたが、ほとんどの団地で、街区型もしくは沿道型への再編、領域性の確保が目標となっていることがわかるとともに、その空間の妥当性についても確認してきた。

わが国の公的集合住宅団地の多くは、いわゆる南面並行配置で住棟が配置され、特に、効率的建設・量的生産が大きな目標となった昭和40年代以降の団地では、大規模にそうした配置が実施され、巨大さもあいまって周辺から隔絶した特異な形態を示している。地域再生のための骨格性の確保、少子高齢化の進む中での優しく安全な

居住環境の有り様として、そういった沿道性の無さ、領域性の乏しさを、いかに解消していくのか、そして、周辺の市街地との連続感の創出の実現を図っていくのが、団地再編、コミュニティの再生のための大きな空間的目標になろうと想定しながら、ウィーンの街区型団地の実態を体験調査した。

ウィーン市内にある15余りのそういった団地を見て回った印象は、筆者らが「団地からまちへ」をテーマに取り組んだ阪神間の大規模団地の街区型建て替え事例（浜甲子園さくら街／2005）で目標にした居住環境に近い印象で、中庭の豊かな空間性、入居者の視線が意識できる安心感、緑や空と共生している実感など、都市型の、それでいて静かで豊かな屋外空間を備えた構成の良さと、まちなみを形成する沿道景観の気持ち良さが確認できた。

6階～8階ほどのものが多く、上階はペン트ハウス型となっていて高さに対する配慮が良くできている。階段室型で小型のエレベーターが付加された15戸程の単位が並んでいるのだが、街区の大きさはまちまちで、豊かな空間性に優れたものが多い。

連鎖して街をつくる市営住宅

図01は、北から南東へカーブしているトラムの走る道路の右側がウィーン5区、左側が12区で、市営住宅のブロックが連鎖して街をつくっていく様が良くわかる。囲み街区といっても、形状は実に多様で、訪れてとても楽しい。①が、ウィーンで最初に出来た市営住宅、メッツラインスターラーホーフ(Metzleinstler-Hof 1916,22-23)。カーブした平面配置に呼応して外壁も曲面が用いられていて楽しい。②は、道路側に開いた前庭広場を持っている。④は道路を跨いで左右に街区型が展開し、この街角にバス停がある。③と⑤でまちに開いた広場を囲んでおり、③では、この広場側にエントランスがある。⑦と⑧の開口は向かい合っている。⑧の改修では階段室ごとのコミュニティ単位で色を変えるなどの取り組みも見られた。囲まれた中庭に面して階段室（住戸アクセス）があるので人気（ひとけ）もあり、その囲まれ感は気持ち良いものが多い。街区型が基本ではある



図01 連鎖する集住街区



写真01 街区をまたぐ開口

が、公道をまたぐ開口が、都市的なスケールで特徴的となっているものも多い。

カール・マルクス・ホーフ

赤いウィーン時代を代表する公共住宅、カール・マルクス・ホーフ(Karl-Marx-Hof / 1927-30)は、地下鉄U4の終点、ハイリゲンシュタット駅の前、全長1kmに及ぶ細長く広大な敷地の端から端まで、特に東側の住棟が切れ間なく連続し、下部に、道路や中庭を跨ぐ半円形の開口がリズム良く



写真02 カール・マルクス・ホーフ 1927-30

(次頁へ続く)



穿たれている。この開口空間は、都市的な気持ちの良いスケールで、一般的な街区型のエントランス開口とは異なるスケールのデザインとなっている。敷地は156,000㎡あり、1,382戸の住戸の他、店舗、食堂、図書館、幼稚園、託児所、郵便局、歯科診療所、薬局といった共用施設がある。



写真03 足元に穿たれた開口が街を繋ぐ

### エーケロ・マラスタッド

街区型ではないが、生活の舞台としての居住環境において、まちなみ・沿道景観を強く意識しているのが、ラルフ・アースキン (Ralph Erskine 1914-2005) による集住環境 (団地) である。ボリュームの分節と素材の使い方、使い分けによって建物を人間のスケールに近づけることに意識を注ぐ建築家である。大きいスケールのものが持つ圧迫感、緊張感を緩和し、小さな分節されたスケールに如何に見せるか、また生活の楽しさのようなことの表現に関心を持ち、決して一つの形式では解かない。ひとつのエリアの中でも複数のスタイルを混ぜ、低層群に高い建物を混ぜたり、用途や賃・分、住宅形式も混ぜ、接地型・積層型



写真04 街並みを形成する集合住宅団地

も混ぜる。住民が、形式を変えても地域の中で住み続けられるように計画する。写真04は、ストックホルムのエーケロ・マラスタッド (Ekerö 1983-91)。多様でスケールダウンされた気持ちの良い通りを形成する集合住宅地のまちなみだが、他の団地の事例もぜひ参考にして欲しい。

## 身近な景観をつくる

サインデザイン専門誌「signs」編集長 武山 良三

### 第7回 勝山町の暖簾：住民と共につくるデザイン

一枚の布を掛けるだけで店の存在感を出せる暖簾は優れたサインだ。手軽でありながら印象的であることから景観まちづくりに活用されることも多い。地元の富山県でも、おわら風の盆で知られる八尾町、高岡大仏への参道である坂下町、五箇山でつくられた生糸を用いた織物で知られる城端町で推進されたことがある。全国でもさまざまな実施例があるが、岡山県真庭市の勝山町並み保存地区は、最も定着した事例といえるだろう。2009年度には都市景観デザイン賞の「美しいまちなみ大賞」を受賞しているの、ご存じの方も多いと思うが簡単に紹介しておこう。

勝山町は1985年、岡山県ではじめて町並み保存地区に指定された出雲街道の宿場町として栄えた町で、今も千本格子の町家や白漆喰壁の土蔵などが残る。東京の美大で学んだ加納容子さんが、実家の酒屋を継ぐために帰郷し、自分でもなにか地域のためにできることがないかと取り組んだのが、テキスタイルを活かした暖簾づくりだった。1995年、自分の店の軒先に掲げたところ、古い町並みの中で染色による色彩が美しく映え、「私の店にもつくって欲

しい」と注文が寄せられるようになった。製作費用を補助する制度がつくられると一気に広がり、100軒近い店の軒先を彩ることになった。暖簾マップがつくられ、スタンブラリーが企画され、お土産用に暖簾ポストカードもつくられた。やがて暖簾散策を目的とした観光客が訪れるようになった。

暖簾を使った景観まちづくりが全国各地で行われる中で、なぜ勝山町でここまで定着したのか。最も貢献していると考えられるのが、デザインと質だ。加納さんが美大で学んだのは織物で、染色は暖簾制作を期に独学で始めたという。図柄を白く抜くための絞りの技もオリジナルだが、独自のじみが手染めの風合いを醸しだし、勝山の町並み景観に実にマッチしている。

すべてオリジナルのデザインも秀逸だ。ひとりの作家が100点も制作するとマンネリになってしまうことがあるが、店主とじっくり相談しながらデザイン案を練っていることから、店主の人柄が表出したデザインとなり、見ていて飽きない。検討のプロセスでは、店主からダメ出しをくらすこともしばしばとのことだが、共につくることで店主の満足度も高い。加納さんの方から「暖簾をつくりませんか」と勧めたことは一度もないという。すべて住民が掛けた

いと思い、依頼しているようだ。手染めの暖簾は、風雨にさらされると3年ほどで掛け替える必要がある。「今度はこんなデザインにしたいんだけど」と声を掛けられるのが嬉しいと加納さん。地元で景観の作り手が暮らしていることの大切さを教えてくれる好例である。



色の区分けが独自に編み出した絞り染めによって柔らかく、出雲街道の町並みに良く調和している。



デザイン案は店主と話し合っ固めていく。スケッチには色鉛筆を常用。

### ホワイトボード

今回は、景観づくりや都市デザインにおける行政の役割や問題点を行政の現場の視点からも取り上げたいという編集委員会の想いのもと、巻頭記事やメルボルのグリーンインフラ政策を取り上げた。感度のよい問題認識と、必要なリサーチ、そして適切な問

題設定は、行政の取り組みで蔑ろにされがちであるが、デイビッド・シム氏とのダイアログの内容からもその重要性は再認識させられる。学生や自治体職員、景観に関心がある方で本誌の内容に興味を持つ方がいたら、是非TDAにご連絡を！